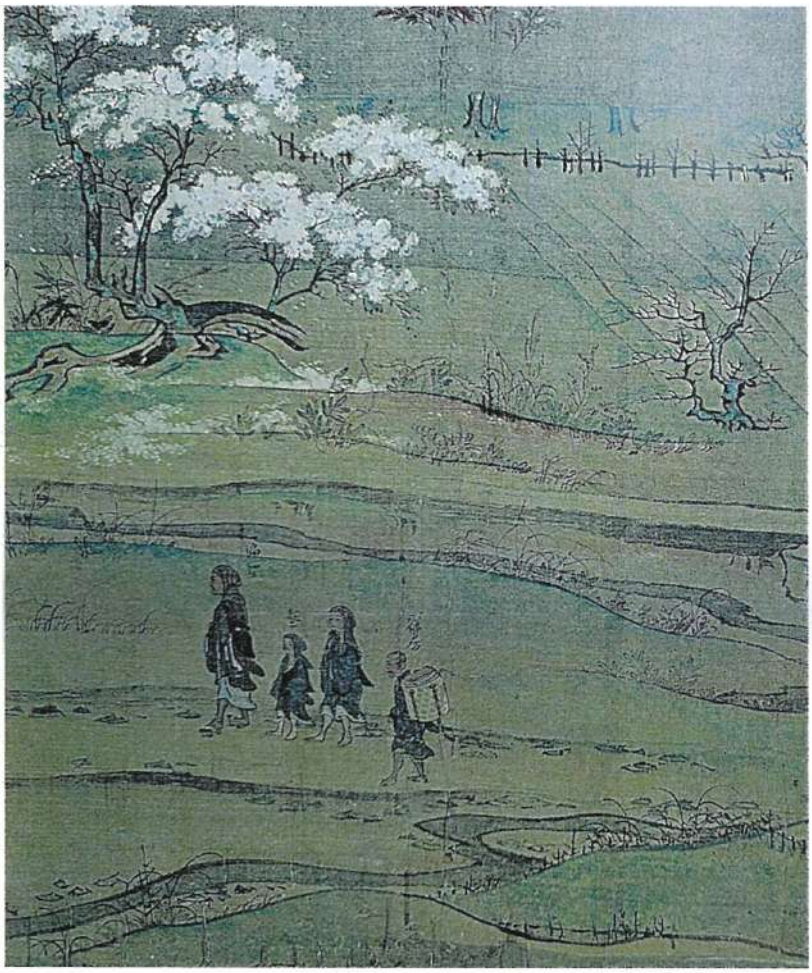
国際熊野学会 会報
Issue 43
発行　国際熊野学会
東京事務局
発行年月日
2025年 5月30日

『一遍上人と生きたこの四半世紀』

国際熊野学会副代表　金山秋男



再出家　桜井の里「一遍聖絵」巻二第二段（清浄光寺蔵）より

人の一生にはいくつかの節目があるようである。無論、現代の市民社会では、かっての通過儀礼のような民族社会の中での役割変換とは原理的に異なるが、世の価値を押し付けてくる時流に抗して、自分らしい生き方を模索する中で形を成してくる節目である。おそらく誰にでもある内面からの呼びかけだろうが、外部への関心と欲望が障りとなって、滅多に耳に届かない。

とかくこのような呼びかけは、病気や災難など、日常生活の破綻として顕在化することが多いようだが、私の最初の節目は三十七歳の時にやって来た。事業に破れた長兄の自死の半年ほど後のことである。一応順調に見えた私の精神に狂いが生じた。気質が似ていた兄の跡を追うかのように、ある日突然一人寂しく暗く果てなき道を歩んでいる気がした。長女はまだ三歳、あどけないこの子を残してはどうしても死ねなかった。電車は飛び込むための、木々は首を吊るための道具に見えた。夏目漱石の『行人』に、漱石自身とおぼしき大学教師が同様の岐路に立ち「僕の人生には三つの出口しかない。死ぬか、狂うか、それとも門を叩くかだ」と語る場面がある。漱石同様、私も第三の道に進み、十年以上積み上げてきたアメリカ文学研究を捨てた。坐禅に活路を求め、それがわが人生の第二楽章となった。

第二の節目は「不惑」も「知命」も過ぎた二十年近く後にやって来た。引き金は次女の病。大学にはサバティカルという、国の内外で研究を促進し充電するための一年の休暇期間がある。二〇〇二年度は私にこの制度を使う許可が下り、当初は成長した娘たちと妻を伴い、ロンドン大学のアジア・アフリカ研究所のフェローとして日本文学について、海外研究者との意見交換を考えていたが、この計画はご破算。ここを先途と思いついたのが、そうだ、この一年を祈りの旅に使おうという考えであった。

既に最初の節目で、私の生きる姿勢も、なにがしか研究から求道というべきものに転じていたが、まだ進むべき道が見えていたわけではない。只管打坐に打ち込みながら、あの難解な道元禅師の『正法眼蔵』に挑戦していたが、五年経っても全く光が見えてこなかった。やっと方向性を掴んだのは「生死の巻」という九十五巻中の短い一巻。そこには、珍しく平易な文章で、あたかも禅と念仏の垣根を超える世界が開示されていた。それが私の死生学事始めである。死生学などという分野がまだほとんど認知されていなかった時代、私は我知らず、その領域に足を踏み入れていたことになる。